

菜類は近所の台湾人が売りに来ていたのでみんなそれを買っていました。弁当もオカユで、おかずは生味噌でまにあわせるのが普通でした。

近くに日本人の学校がないので、一週間ほどしてから汽車で二駅さきの国民学校まで通うようになり、翌年三月まで六十人くらい毎日汽車通学でした。僕の編入された五年生は四学級ありましたが、他府県出身の教師や生徒からずいぶんいじめられたものです。いつも琉球ワー（豚ク）といっぺからかわれ、作業や掃除も特別に残されて押しつけられ無理にさせられたものでした。なぜこんなにいじめられるのか、口惜しくてたまらなかったが、教師の側からすれば沖縄県からの疎開者は学力が相当劣っているといわれ、そのことも面白くなかったのかもしれない。いつもいじめられてばかりではしゃくなので、三か月めごろからは疎開組も団結して対抗するようになりました。「琉球は空手の強い島だから、なぐられたら死んでしまう……」。親が教えたのか、僕らが団結するようになると、他府県出身の子どもたちもしいにおとなしくなっていくたようです。

昭和二十年に入ってから空襲もはげしくなり、通学の途中しよつちゅう汽車はストップし、おりて線路ぞいの竹藪に避難することが多くなりました。そのため四月からはヨーバイの公学校に転校しました。公学校というのは台湾人を中心にした学校です。ここは千人くらいの学校でしたが、校長は久米島出身で、教師の多くは日本人、いじめられることはなくなり非常によかった。しかしあい変らず台湾人からは琉球ワーといっぺからかわれ、寮で炊事をして

栄丸は出港後およそ四十五分いで港外に出ました。波が非常に荒く、父は危険だから引き返そうと言いついて、引き返すことになりました。右舷へカーブしたと同時に、焼玉エンジンの玉が切れてエンジンが止ってしまいました。船はそのまま左舷（後方）へ流れはじめたのです。岸からおよそ四百メートルの沖合を四時間半も流されたように思います。船からは岸のあたりがよく見え、船の周りは岩礁ばかりいっぺい突き出ている感じでした。石油をぶっかけて衣類に火をつけ岸に向けて合図するけれども反応がないのです。

そこは万里といって二十軒ほどの台湾人の部落でしたが、反応のないまま船は沖合百メートルくらいところで船尾を岩礁に乗りあげてしまいました。前方から押しよせてくる大波が激しく船べりをたたき、僕は船長室のすぐ下にいましたが、一、二分ごとに襲ってくる大波の三回めかにドラム艦と一緒に海に投げとばされました。その瞬間、大きな叫び声を聞きましたが、何とも言えない気持ちでした。

万里部落には、日本軍の通信隊がいて、気がついたらその兵隊が人口呼吸をしてきていました。遭難の現場は岩だらけで、真夜中、はげしく荒れくるう波に押し流されても岩にぶつからず、岸べに達したもののみが、あるいは岸べにうちあげられたものが救出されたのです。兵隊と一緒に台湾人もタイマツをともしながら手をさしのべて救いあげていました。夜が明けてみると、岩上には遭難したはずの栄丸の姿はかげもかたちもなく、ただ機械だけが残っており、そこら一面船の材木らしいのがうちあげられていました。救出されたのはわずかに三十二人、死体の多くは岩や船の破片にたたか

いるときなど、つかつかと入ってきて、「何を食べているのか？」と言って、平気でナベ蓋をあけるのです。そういうこともあって、いつまでも仲よくならず、一部を除いては絶えず争いがつづいていました。

八月十五日、終戦の詔勅は学校に集合させられて聞きましたが、何のこともよくわからなかった。しかしそれ以後は学校に行くこともなく、一週間ばかりして自然にやめてしまいました。疎開者も帰り仕度を始めようになり、同じ台湾内にいる親戚をたずねて行っってしまったりで、だんだんばらばらになっていきました。十月上旬に入って、土建業をしていたために戦争中は飛行場の工事や兵舎づくり、城辺街道の補修工事をさせられて宮古に一人残っていた父幸吉（42）が池間の漁船を借りて迎えに来てくれました。中旬ごろ僕らの家族だけトラックに乗り、基隆へ向いました。港近く台湾人の家を借りて住むと、父は宮古に帰る船をさがすために毎日歩きまわっていました。ようやく同郷の砂川玄祥さんから栄丸の切符を手に入れ、塩、砂糖、衣類を買いこみ、船に積みこみました。

国民軍のきびしい警戒の眼を盗んで乗船したのが十一月一日の夕方六時ごろ。一時間後にはみつかることなく一路宮古に向けて出港しました。乗客は百七十二人と記憶していますが、一緒に疎開した人は一人もおらず、みんな早くから台湾に移り住んでいた人、あるいは別の疎開組で、下地村出身者が多く、いずれも宮古へ帰る人たばかりでした。栄丸は戦時中は基隆のドックにあったものを他府県の人たちがよせ集めの器材で修理し、開船に仕立てたということでしたが、父が団長格のようなものになって出港しました。

れて首のないもの、片足だけのもの、惨憺たる姿で岸べにうちあげられ、なかにはまだ海にただよっているものもありました。これらみえる限りの死体は引揚げられ、船の破片を燃やして火葬にふされました。

僕の家族は僕と母の二人だけがたすかり、父も兄も弟二人も、守りもみな死にました。末の弟の博は、母がおんぶしていたが、母が兵隊に救いあげられるときまではちゃんとおぶわれていたのに、母の腕を引いて救出するさいに帯ごとずるずると落ちていったと、あとで聞かされました。母はそのときの博の泣き声が耳にこびりついていると言って、そのまま気が狂ってしまい、一年余も半病人の状態がつづいていましたが、現在もお海をみると、船に乗るのを嫌がり、当時の遭難もようについてもまったく語ろうとしません。父と博と子守りのシゲなど三人の死体は傷だらけになって発見されましたが、兄の繁と上の弟の光雄はどうとうみつきりませんでした。

火葬をしている最中に僕は軍のトラックに乗せてもらい、台北にいる母の妹や親戚に遭難のようを知らせに行きました。母は基隆の病院に一週間入院したのち、台北の親戚のもとへ移り、十一月末になって母の妹婿の国仲昌道さんが迎えにきてくれたので、十二月十五日夕方スオウで、宮古から来た漁船に乗り、翌十六日ひる三時ごろには石垣に着いて一泊、十七日あさぶじ平良に着きました。

疎開前まで住んでいた平良の大三俵の自宅は父の弟上地金四郎が一人留守番をしていました。叔父の家族は叔母と子ども二人（男女各一人）が台南州に疎開していましたが、三人とも疎開先でマラリ

アで死んでしまいました。僕と母は帰った当座は下地に残っていた財産を処分したり、叔父の働きでようやく三年位はくらしをたてることができました。そのあとは旧制中学から新制高校を出るまでいろいろなアルバイトをして高校卒業後はすぐ米軍にはたつき、その後民間会社をへて公務員になり現在に至っています。

## 栄丸遭難 2

平良町字西里(鏡原) 島尻 哲夫 (十五歳)

飛行場用地に家屋敷畑もとられる

昭和十八年九月ごろであったとおぼえています。夕方、直接兵隊によばれて部落の青年会場へ出かけて行った父(島尻藩)の帰って来てからのななしでは、現在住んでいる家屋敷や畑のすべてが飛行場予定地に入っているで立ち退かなければならない、ということでした。ほとんど考える余裕も与えられなかったと思います。

その日から三日ほどしてからです。ぼくの家のずっと西側の方から何百名かの人が来て、地ならし作業をはじめました。とうとう立ち退くことになるのかと思うと、悲しいというだけでなく、やはり腹のたつ思いでありました。父は篤農家で、畑は五町歩くらいありました。収穫を間近にした砂糖キビをそのまま捨てるのも相当つらいことであつたと思います。そのまま何もかも放つたらかして、追われるように市街地に近い富名腰部落に引越しました。ここで四反歩ばかりの土地を手に入れて再び農業をはじめたが、もの

た。遺体はすべて傷だらけで、皮膚は全部むけてしまい、ちようど豚の皮をはぐと白味がでる、そうしたようなほとんど確認できない状態でした。二人の姉の遺体もあがりしました。そのほかぼろぼろにくさつて、どこの誰だかまったくわからなくなっている遺体もあつたと聞きました。遭難したところはスオウの近くで、あそこにはまだ通信隊が復員せずについて、タイマツを持った台湾の人と一緒に救助活動をしてくれました。父や姉たちの遺体はスオウの岸で火葬にし遺骨だけを持って、池村一男(母の弟)につれられて宮古に帰りました。十一月十五日ごろであつたと思います。

なぜこんなひどいめにあわねばならなかったか、いまから考えたら馬鹿らしいとも思うし、また止むをえなかったとも思います。キールの十一月といえば全然太陽をみない雨ばかりの季節です。こういうところで知人はおらず、とめてくれる家もない。たくさんの人が港近くの、空襲で屋根もない煉瓦の壁ばかりの廃屋で一時しのぎをします。雨が降るとそのまま直通でぬれ、そのうち土間には水がたまって眠るところがせめられる。仕方がないので荷物をぶちこんで雨水を避け、煉瓦の壁にもたれて何とか睡眠をとるありさまでした。そればかりか時には武装した中国兵が来てピストルでおどし、荷物を奪っていく。ちよつとでも抵抗すればどうなるかわからない。毎日のように誰だれが殺されたという話しか聞こえてくる。そんな船待ちのあけくれでしたから、誰もが一日も早く宮古へ帰りたいと思っていたのです。

ボロ船でも乗せてくれればありがたい。栄丸が出たあと、港まで来て乗せてもらえなかった人びとのなかには非常に嘆いた人もい

すごくやせた土地で、とてもやっていけそうもない状態でした。

そのうち戦争がはげしくなるというので、疎開がはじまり、ぼくたちは台湾の高雄に姉ヒデ(23)を頼って疎開しました。疎開したのは宮中二年のぼくと、姉ミツ(28)、姉キクエ(19)の三人で、昭和十九年七月の暑いころでした。

## 栄丸で父と姉二人失う

台湾でもいろいろと苦しいめにあいましたが、とにかく終戦になり、二か月くらいたってから父が迎えに来てくれました。十月二十三日ごろであつたと思います。父がいろいろ奔走して、ようやく十一月一日にキールン港から栄丸で宮古に帰れることになりました。

しかし栄丸は相当のボロ船で、出港して一時間ぐらいたらエンジンが止ってしまい、ものすごい波にもまればじめました。乗客はつぎつぎと船からたたき落され、しだいしだいに減って行って、結局全員が海に放りだされてしまいました。栄丸に乗っていたのはみんなで一八三人。そのうち三二人が救われたと聞いています。ぼくはかなり早いうちに海に落ちたと思います。わりあい沖でこのことであり、はじめのうちは泳いでいたことはおぼえています。救われたときのもようはまったく記憶にない。何でもすっぱだかの状態で陸にうちあげられているのを発見されたのが、遭難して三日めだと聞かされました。みつけた台湾の人が、自分の家につれて行き、おかゆを食べさせたりして介抱してくれました。

ぼくがたすけられて二日くらいしてから、父の遺体があがりましたというほどに、誰もが早く帰りたいのでした。

## 遭難者の補償さえない

疎開したさきの義兄(姉ヒデの夫)は、ぼくらが行ってから召集され戦争へ狩りだされました。しかし戦後の外地からの復員はずべていったん本土の港に着いてから、それぞれの落ちつきさきへ帰っていたので、義兄は沖組へ帰るまえに妻が死んだ事入づてに聞いて、帰る気も失い、そのまま本土に住みつてしまいました。

生前、父はよく海軍飛行場用地にとられてしまった七原の土地代について、「入口から入って来て金を渡し、出ていくとき金をとってあげて出口から出ていく」ようなやり方だと言っていました。

地料は一応計算して渡しはしたが、その場でそっくり強制貯金をさせられ、一銭も手にはわたっていない。いわば土地は強制的にたどりされたとも言えます。それも国をあげての戦争ということだから仕方なかったとしても、いまはもう戦争は終わったのだから、その代償というか、そういうものを国は考えてくれてもいいのではないか。日本はGNP世界第二位といわれ、世界でも大きな国になったが、その裏にはこのような大きな悲劇があるということをかえりみようともしないことは問題だと思えます。戦争が終つて必要がなくなればいつでも土地は返すとはっきり約束したと言っていて、いまも軍との約束をおぼえている人もいるのに、こんなにはっきりしていることさえ解決しようとせずに、何がGNP世界第二位かと言いたくなる。政府はもつと考えてもいいのではないですか。

栄丸の遭難は、戦争中のことではないので、何の補償もされてい

ません。直接弾丸にあたらなかったというだけのことであって、国の政策にしたがって土地をとられ、台湾に強制疎開させられた。戦争は終っても国が引揚げのめんどろをみてくれないので、自力で帰えろうとして遭難したのです。戦争の犠牲者であることには変わりはないはず。母の立場からすれば昔から住みなれた家も屋敷も畑もとられ、そのうえ夫と二人の娘を同時に失ったのだ。せめて母が生きているうちに、以前の土地だけでも返してもらいたかった。母は悲しみのあまりろくに外出もせず、数年後に死んでしまいました。

### 栄丸遭難 3

#### 下地村字与那朝 友利 完 誠

そのころ私は下地村の助役をしながら、警防団長をかねていました。昭和十九年九月に下地村の疎開者を引率して台湾へ行き、しばらくして帰ってきました。引率して行ったという責任もあつたので戦争が終つて二か月ばかりたつた昭和二十年十月、疎開者を迎えに台湾へ渡りました。村の代表としては私一人行きましたが、あれだけの疎開だし一べんにみんな帰えすというのはとても無理で、船を借りてはじょじょに帰えすという方法でぞみました。しかしなかには早く帰えりたい一心で、疎開者自体で船を借りて帰る人たちもいました。そのなかの一隻が遭難した栄丸です。栄丸では一〇五人の人が死んでいます。そのうち下地村出身は七四人でした。また下

わりにかついできて浜に積みあげ、その上に二人がかりで死体をイチ、ニノサンと投げ投げして積みあげてから油をかけて夜通し焼きました。

遭難して二、三日あたりは多少くずれていても着けているものなどで誰と見わけもつくが、四、五日もするともう波がもつてきて瀬の端などにたたきつけているものなどは、眼が落ちくぼんでしまつて誰が誰やらわからなくなつてしまふ。瀬の端にはまりこんでいるのでつかんで引きぬこうとしても皮がすりむけてぬけないから、そこらのワラを拾つてきてまきつけて引きぬくなどしました。暗くなつてきようはこのくらいで終りにしようと言つて帰えろうとして見ると、翌日引きあげるべき死体がまた見えているのです。それを鷹の群れが飛んできてついでに食べたりしている。だから引きあげるまでにはもうあちこちくずれてしまつています。四、五日めあたりからは着物などはもう何にもつけておらず、波がうばつていくのかはだかのままでした。私は台北にいて栄丸の遭難を聞き、翌朝早く行って救助作業に加りましたが、死体が一番多くあがつたのは一日に五十二人で、そのごは十人、二、三人とかでだんだん少なくなり、毎日油をかけて焼きました。たすかった人のなかには平良の山内朝二さんがいました。洲鎌という人は家族はみんな死んで子ども一人だけ助かったですね。山内さんの場合、瀬に顔も何もかもたたかれて、真赤な血が流れておりとてもみられたものではなかつたです。

遭難した海岸に宮古支庁に勤務していた垣花恵栄さんが宮古疎開者遭難の碑々と書いた小さな角材の碑をたててくれました。

地のなかでも川満部落の人がもつとも多く六三人も死んでいます。死者の数が人によってまちまちのようですが、私は遭難したことをその夜のうちに聞かされたので翌朝早く現場にかけつけて救助作業にあたりました。八日間も死体引揚げと火葬にあたりましたので、私のいう数字はもつとも正確だと思います。あたらずといえども遠からずだはずです。

台湾のキールン港の外はどんなに風のない静かなときでも波の非常に荒いところがあります。栄丸の出港を見送っていた人たちの話では、栄丸は水平線のところまではよく見えていたそうです。そこからまで行つてから機械が故障して流されたようです。キールンの波の荒いところまで流されてきて波にたたかれていたわけです。波うちきわからはそんなに遠くないところですよ。そこまではみんな船に乗ってひやひやしながら流れてきたそうです。そこで波にもまれて岩にうちつけられたりして死んでおるわけです。さいわいたすかった人は逆に波にもらあげられて浅瀬にのしあげてたすかっているのです。

遭難したのは昭和二十年十一月一日夜のことですが、私はその夜のうちに栄丸遭難をきいたのでさっそく翌朝現場にかけつけることができたのです。下地村出身の人だけをえりわけて引揚げることとはできるわけもなし、みえるものは片っぱしから引揚げて片づけました。死体を片づけるだけでも八日間もかかりました。その間台北の子守り姉の家から朝夕汽車で通いました。潮の関係で一べんには流れつきませんから、あとには手がなかつたり足がなかつたりしてひどいものでした。死体は船がこわれて流れてくる船材を薪が

そのあと私は池間のカツオ船が疎開者の引揚げのために来たので、一人あたり三百円の船賃で基隆からどんどん下地の人を帰しました。私は三回めに乗船しましたが、三十人くらいで昭和二十一年の一月一日か二日ごろでした。途中八重山の西表島に泊つて二日のよる池間につき、翌朝平良の井上造船所あたりでおろしてもめらいました。私の家族も父完悟(73)と長女(国民学校6年)二女(同3年)の三人は昭和十九年九月、台湾の屏東に疎開させていましたが、父がそこで病死したため、二人の娘は台北にいた子守りのもとにいましたので、このとき一緒につれて帰りました。